

自由論題 1

報告テーマ

終戦後の北満農村における地方勢力と政党

——黒龍江省樺南県における実地調査を基に

Local forces and political parties in Northern Manchuria after World War II

--Based on the field investigation of Huanan County in Heilongjiang Province

氏名(所属)

関日昇(慶応義塾大学)

GUAN RISHENG (Keio University)

要旨(800字程度)

論文要旨

近代以来の北満農村の周縁地域は、往々にして地方有力者や匪賊などの地方勢力によって支配されてきた。そのため、第二次世界大戦後、国共両党がどのように地方勢力との関係进行处理するかは、北満農村ひいては満州政権の帰属に対して極めて重要な意味を持っている。近年、終戦後の国共両党の北満農村における地方勢力との関係について、多くの研究成果が蓄積されてきた。しかし、1946年以降の内戦期及び共産党による地方勢力消滅の様相に関心が向いている研究が多く、現地調査を基に、地域社会の文脈から地方勢力と政党の相互関係を検討する研究は未だ十分ではない。こうした状況を踏まえ、本稿は、北満の樺南県の村落を事例として、地方誌文献及び筆者が現地で実施したインタビューの結果を用いて、終戦から内戦勃発までの北満農村における地方勢力と政党の関係を考察する。

考察を通じて、本稿は終戦から内戦勃発まで、地方勢力は共産党と協力関係をもつこともあれば、国民党と対立関係をもつこともあったということを明らかにする。地方勢力と政党の協力から見て、地域社会の文脈は重要な役割を果たしたのである。共産党との関係については、1930年代の満州国期に共産党が遂行した「抗日民族統一戦線」という政策は、共産党が終戦後に順調に地方勢力の支持を得ることに對して重要な基礎を提供した。国民党との関係については、地方有力者は1940年代に満州国政権と結合し、農村社会を支配していたため、国民党政権への協力に抵抗していない。特に、共産党との関係が破綻し、また国民党からより良い条件を提供されると、地方勢力は国民党に帰順した。また、地方勢力と政党の矛盾から見て、近代以来の国家は政権樹立を目的としたため、地方社会に対する地方勢力の独占を排斥する態度をとっていた。共産党であれ、国民党であれ、地方勢力の改編後には、地方勢力を弱体化させる策略を用いていたのである。これは地方勢力と政党の関係が破綻する要因となった。